

---

## 最近のテレビ・バラエティー番組に関する意見

---

### 放送倫理検証委員会

委員長	川端 和治
委員長代行	上滝 徹也
委員長代行	小町谷育子
委員	石井 彦壽
委員	市川 森一
委員	里中満智子
委員	立花 隆
委員	服部 孝章
委員	水島 久光
委員	吉岡 忍

## 緒言 本意見書のスタイルについて

本委員会は、最近のテレビ・バラエティ番組について、これを審議対象として取り上げるかどうかの討議に5回、審議を開始してからは、もっぱらこの問題を論じるために開いた2回の臨時委員会を含め、5回の委員会期日を費やしてきた。討議・審議は9ヵ月に及んだ。

このような膨大な検討時間を要したのは、この問題がテレビという表現媒体のもっとも根源的な部分に関わっていることを、委員の誰もが自覚し、慎重にならざるを得なかったことによる。

\*

委員会は、「放送倫理を高め、放送番組の質を向上させるため、放送番組の取材・制作のあり方や番組内容などに関する問題について審議する」（放送倫理検証委員会運営規則4条1項）ことをその任務のひとつとしているが、ここでいう「放送番組の質の向上」のための審議は、あくまで放送倫理・番組向上機構の「正確な放送と放送倫理の高揚に寄与する」（放送倫理・番組向上機構規約3条）という目的の範囲内で行われるのであるから、放送倫理という視点から離れて自由にバラエティ論を展開できるわけではない。

しかし、バラエティのもっとも本質的な特性は、面白く、わかりやすい表現によって既成の規範や権威や権力の真実の姿をさらし、視聴者の笑いや驚きや納得を誘うことにある。そのために工夫された新しい発想と表現方法が見る者の心を刺激し、解放して、より自由で、とらわれのない世界へと導いていく。

つまり、バラエティ番組がバラエティとして良質であればあるほど、既成の通念や権威による表現についての限界設定という性質を持つ放送倫理とのあいだに、少なくとも形式的には、齟齬が生じる可能性が高まることになる。

また、良質のバラエティは、種々雑多な内容と質を持つ数多くの番組という広い裾野の上に初めて出現するはずであるから、裾野の質を論じてこれを弾劾することも、頂点のあり方を歪めてしまう可能性がある。

\*

現在放送されているバラエティ番組には、相当数の視聴者が不快感・嫌悪感を持ち、反発するような問題点があることは否定できない事実である。

しかしながら、世間の規範から逸脱し、視聴者に不快感を与えたとされる番組に放送倫理基準を機械的に当てはめて結論を出せば、それで足りるというわけではない。そのような安易で機械的な倫理基準の適用による断罪を行えば、テレビ番組のなかでももっともテレビらしいジャンルを窒息させ、これからの発展の可能性をも封じてしまうことになりかねないからである。

私たちが腐心したのは、委員会の任務とバラエティ番組の質のあいだにあるこの矛盾を、いかにバラエティ番組の充実という方向で解決するのかということであった。

委員会は、バラエティ番組がこれまで人々をタブから解放し、より自由で、風通しのよい社会を作ること貢献してきた事実を高く評価するがゆえに、一方でバラエティ番組において放送倫理がもっと実質的に尊重されるような意見を述べつつも、他方でバラエティ番組がその自由で斬新な表現という特性をより発揮するよう制作者を励ますことのできる方法はないものかと考え、悩みつづけた。

\*

委員会がこれまでに出してきた意見、見解、勧告のスタイルは、放送倫理を根拠にする番組批判には適したものであったが、しかし、本件でそれを踏襲したのでは、委員会の真意は、娯楽を倫理で断罪することに反発する制作現場には届かないであろうし、コンプライアンス強化という名目による番組規制を呼び込んで、バラエティ表現をいたずらに萎縮させるおそれもある。これでは委員会の意図に反する結果になってしまう。

そこで委員会は、バラエティの諸問題を検討するにあたり、これまでの意見書のフォーマットや文体を捨て、まったく新しいスタイルによってこの問題を論じることにした。バラエティ問題を適切に扱うためには意見書のバラエティ化を図ってみるしかない、と考えたのである。

これは多くの人に奇異な印象を与えるかもしれない試みであるが、委員会自身が、従来の様式や文体から逸脱していくスタイルを意識的に採用することこそが、バラエティの質の向上と倫理問題を同時に論じうる唯一の道であると思いついたためである。

この点をご了解の上、以下の意見書をお読みいただきたいと思う。

BPO放送倫理検証委員会

カット 里中満智子

# 目次

緒言 本意見書のスタイルについて .....	1
I はじめに——バラエティーを検証しても意味がない? .....	4
II バラエティーを考えるとすることは、大変なのだ .....	6
1. バラエティーって何だ? .....	6
2. バラエティーと世の中との関係 .....	8
3. バラエティーは腕白坊主か? .....	9
4. バラエティーは危機なのだ! .....	11
5. 視聴者意見と委員会 .....	13
III バラエティーが「嫌われる」5つの瞬間 .....	15
1. 下ネタ .....	16
2. イジメや差別 .....	16
3. 内輪話や仲間内のバカ騒ぎ .....	17
4. 制作の手の内がバレバレのもの .....	19
5. 生きることの基本を粗末に扱うこと .....	20
IV なぜ、コレが嫌われるのか .....	22
1. 「つまんねえよ」と視聴者は言う .....	22
2. 視聴者は素人ではない .....	24
3. 生きることの基本を粗末に扱う、とはどういうことか .....	27
4. 昔、バラエティーは何を笑っていたのか .....	27
5. 王様の笑い、庶民の笑い .....	28
V バラエティーが成り立つ公共空間 .....	31
1. テレビ本来の姿としてのバラエティー .....	31
2. いま、視聴者の現実が見えているか .....	33
3. これまでのあらすじ .....	35
VI おわりに——バラエティーに新しい力と魅力を .....	39

## I はじめに——バラエティーを検証しても意味がない？

倫理である。

検証である。

そんなカタい言葉を2つも看板に入れているBPO放送倫理検証委員会が、バラエティーについてあれこれ言う。

もうそれだけで、バラエティー番組制作者やタレント・芸人諸賢からブーイングが聞こえてきそう。実際、この夏から秋にかけて、委員会がバラエティー問題を審議していると伝え聞いた放送関係者から、

「バラエティーっていうのは、良識や社会通念を笑いのめして、揺さぶって、ものの見方を自由にするもんでしょ。おたくらに目の仇にされて、放送倫理で縛られたら、バラエティーなんか成り立たない」

とか、

「バラエティーを理屈っぽく検証するのは、ネタ明かしするみたいなもんじゃん。笑いに理屈なんかないんだから、検証したって意味ないっすよ」

そういう文句なのか、不満なのか、ひと山あった。

別段私たちは、バラエティーを目の仇になどしていないし、ネタ明かしのような検証をするつもりもない。そもそも委員会がバラエティーを取り上げることにしたときも、あれこれ言おうと考えたわけではない。

「あれ」と「これ」しか言わない。

私たちはそう決めていた。たくさんを言って、結局、制作現場が窮屈になる。それこそ常日頃、委員会がもっとも心配していることだからである。

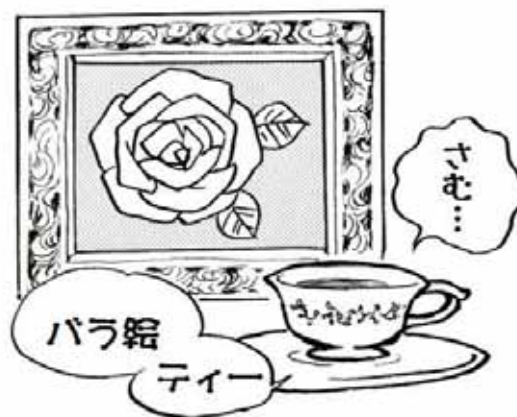
「あれ」と「これ」に入る前に、ひとつ、はっきりさせておきたい。

\*

委員会がバラエティー番組を検討テーマとして設定したことには理由がある。

日本の放送界が、放送法と電波法によって直接に行政の監理下に置かれ、しばしば行政指導の対象になっていること、言い換えれば、公権力を監視すべき放送メディアが、公権力によってじかに監理・指導されるといいういびつな状態にあることについて、委員会はこれまでもたびたび疑念を表明してきた。

その状態のもとで、この四半世紀のあいだに行政当局によって行われた「注意」「厳



重注意」「警告」は30余件に及ぶと見られるが、そのうちの20余件、じつに7割近くが広い意味でのバラエティー番組に対してであった。今年に入ってからのも、みなバラエティーに関してである。

しかし、委員会は、たとえば直近の3番組について、長時間の検討をしたものの、「注意」や「文句」に類することはひと言も口にしなかった。杓子定規に放送基準等と付き合わせれば問題点を指摘できるとしても、それは重大なものとは言えない上、その当該局がみずから比較的早い段階で是正措置を講じていること、さらに重箱の隅をつつくような指摘は表現の自由を萎縮させることにしかならないこと、等を勘案したからであった。

だが、一方で私たちは、バラエティー番組が頻繁に公権力の干渉を受けるような隙を作っている現実には、制作者たちは放送の置かれているいびつな状態を真剣・深刻に考えていないのではないかと心配してもきた。そのような隙を作り、つけ込まれること自体、表現の自由を危うくし、ひいては民主主義の進展を阻害するのだということに、制作者たち、また放送界全体はどれほど自覚的だろうか。

バラエティーは実際のところ、法律や行政と表現の自由という微妙で、ときには危ういバランスの上に乗っている。そのことを頭の片隅において、以下にお進みください。

\*

さて、では、「あれ」とは何か？

世の中には、人々を愉しませるために作られたバラエティーが、「嫌われる」瞬間というものがある。その現実くらいは知っておいて損はないのではないかと、ということ。

「これ」とは何か？

バラエティーが意欲的にあらたな表現と笑いを作り出し、放送界現下の「コスト削減の嵐」と「コンプライアンス強化の波」をはね飛ばし、視聴者とのあいだにダイナミックな公共空間を作り出してほしい、という期待である。

何のこと？

と、ここで首をひねった人、「あれ」はわかる、わかるような気もするけれど、「これ」の方は公共なんてコムズカしくてワカンナーイという人、どうかすこし辛抱して、この先を読み進めていただきたい。

\*

ここで、お知らせです。

この意見書は、どこか特定の放送局や番組に宛てて書かれたものではない。体裁上は、現在のバラエティー番組の主たる舞台である民間放送局の連合体、日本民間放送連盟（民放連）宛てになっているが、私たちのつもりでは、放送界全体、とりわけテ

レビ・バラエティー番組の制作者が、ここで述べられていることを叩き台に、それこそあれこれ議論して、バラエティーを盛り上げるための踏み台にしてもらいたい、ということである。

叩き台である。踏み台である。であるからして、踏まれても、叩かれても、委員会は文句を言わない。むしろ本望と心得ている。

それでは、「あれ」の方から始めたい。

このあと、すぐッ。



## II バラエティーを考えるとすることは、大変なのだ

### 1. バラエティーって何だ？

バラエティーを定義するのは、案外むずかしい。

辞書には「落語・漫才・曲芸・歌舞など諸種の演芸をとりまぜた演芸会。また、その種の放送番組」（「広辞苑」第6版）とあるが、いまだきこの例にあるような演芸だけで成り立っているバラエティー番組など、かえって珍しい。ちなみに、英語の「variety」は、変化、多様性、変わり種の意味である。

雑学やクイズや占いであれ、健康ものや紀行ものやスポーツものであれ、情報番組や歌番組や時事討論番組であれ、そこにタレントや芸人が出てくれば、現在では、もうそれだけで立派にバラエティーである。いや、タレントらがいる、いないに関わりなく、ネタの選択や演出の仕方ひとつで、バラエティーっぽくなる。

つまり、バラエティーは出演者によっても、構成や演出の仕方によっても定義される番組スタイルということである。これは相当に幅広く、奥も深い。

\*

最近、日本放送作家協会編『テレビ作家たちの50年』（NHK出版、2009年8月刊）という本が出版された。刊行の旗振り役を務めた同協会の市川森一理事長は、放送倫理検証委員会の委員でもあるから、身内のよしみ、以下、しばらく勝手に使わせてもらうことにする。というのも、バラエティー番組の内幕や盛衰を、各時代の制作者や放送作家がコンパクトに、網羅的に、かつ面白おかしく語っている資料は、じつは他にあまりないからである。

サクセスストーリー、失敗談、ドタバタ、てんやわんや、楽屋話、制作秘話。こうした現場のナマの話を下敷きにして、バラエティーについてここで語られていることを無理やりまとめると、

（1）バラエティーはテレビ放送の最初からあった。

（2）ドラマや報道のような標準形式のないバラエティーは、「何でもあり」のバイタリティーあふれた、猥雑な世界だった。

（3）それだけに、1分で終わるようなネタでも、制作者も放送作家もタレントもいっしょになって、半日どころか2日も3日もかけ、放送直前まで脂汗をかきながら考え、無我夢中で作った。

（4）かと思うと、制作者が場を設定し、あとはタレントや芸人のアドリブとセンスだけで進行するバラエティーが現われ、さらに時代が下ると、ライブ感を強調するENG（Electronic News Gathering。ビデオ機材によって機動性を高めた取材・制作の手法）や高度化した編集機材を駆使したバラエティーが登場するなど、次々に手法や構成の冒険も繰り返された。

（5）話題にもならず討ち死にした番組も掃いて捨てるほどあったが、斬新なバラエティーは出現自体が「事件」となり、日本中の話題をさらった。

（6）制作関係者がネタを考え、新しい才能を発見し、新形式と新ジャンルを開拓し、創造と破壊を繰り返してきた経験とエネルギーが、バラエティーをテレビならではの表現スタイルの中核に押し上げた。

（7）かくしてバラエティーの手法は、報道番組や情報番組も含めたあらゆるジャンルと混じり合い、テレビに欠かせない重要な表現方法となって、今日に至っている。

……というようなことである。

となると、いまやどれがバラエティー番組で、どれがそうでないかを区分けすることはほとんど不可能であるばかりでなく、意味もないというに等しい。実際、何を制作するにせよ、面白く、わかりやすく、と腐心する制作者の実感もそういうものかもしれない。したがってこの意見書でも「バラエティー」「バラエティー番組」「バラエティー的表現」等々と、ごちゃ混ぜに使うことにする。別段、他意はないので、それぞれの仕事や役柄に応じ、放送関係者それぞれがどうか我が事として読み取っていただ



ければ幸いである。

この本は多くの放送作家や番組制作関係者等が書いたり語ったりしたものだから、バラエティーばかりではなく、ドラマのこともたくさん載っている。報道についての記述も少々ある。

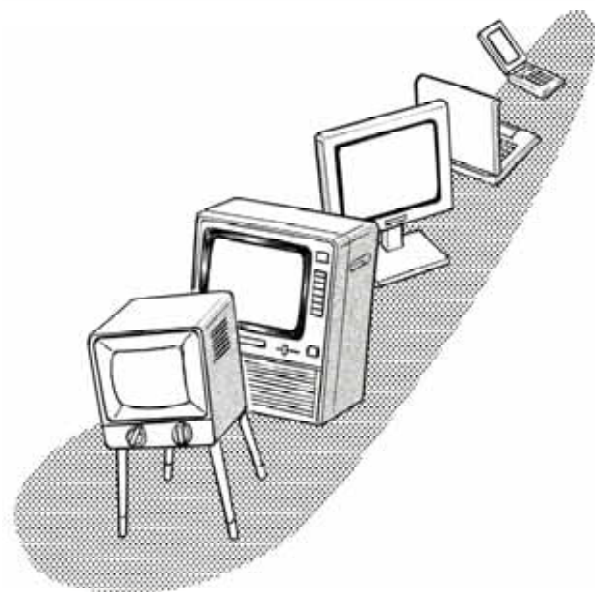
しかし、言及されている番組名や出演者の名前を見て、懐かしく、ありありと思い出すのは、やはりバラエティー番組の数々である。当時の自分や家族や友人のこと、時代や世の中の様子、そのとき見ていた画面の形や色までよみがえってくる。

バラエティーってエライ、と私たちもあらためて思う。

## 2. バラエティーと世の中との関係

テレビは、ひとつの産業として多くの仕事を作り、たくさんの制作者や放送作家や出演者を輩出してきたが、それとは桁違いの規模で視聴者を作ってきたメディアである。

テレビは「いまこれが大事な問題だ」と言い、「いまこれが面白い」と教え、その意味ばかりか、取り上げたテーマ、事実、材料の面白がり方や批判の仕方まで、映像



と音声と文字を駆使して、わかりやすく解き明かしてみせる。視聴者はテレビを見て、「ああ、そうなのか」と納得したり、「それは、ちがう」と反発したりする。家族や友人らと話題にし、また面白がったり、けなしたりする。

賛同であれ、反対であれ、テレビが伝えたことを軸にして、あちらでもこちらでも人間同士が言葉を交わし、それらが波紋となって広がり、全体がゆるやかにつながっていく。テレビには人々の関心事を作り出し、さまざまに共有させ、共

振させることを通じて世の中のまとまりを醸成するパワーがある。他のマスメディアにも同じ力があるとしても、影響力の大きさではとてもテレビにかなわない。

そして、そのテレビの中核的な番組スタイルこそ、バラエティーだった。

\*

バラエティーには笑いがあり、驚きがあり、発見があり、怒りや悲しみもある。これらは、人の身体と情動と暮らしのいちばん近いところで作用する力である。

まっすぐに響くオシャレな会話とジョーク、ギャグとコント、ボケとツッコミ、口調と間合い、台詞と仕種、話題とキャラクター等々は画面から人々の日常に流れ込み、

視聴者の知識の量と質を変え、感じ方、考え方を変えてきた。それはそのまま一人ひとりの「常識」や「秩序」、「社会通念」や「権威」に対する態度を変え、家族や友人、地域や社会とのコミュニケーションの仕方と関係のあり方を変えることにもつながった。こうしてバラエティーは、人と時代と世の中を動かしてきた。

言い換えればこれは、バラエティーこそ、古い秩序や権威を笑い飛ばし、いま世の中を窮屈にしている常識や社会通念を揺さぶって、人々に新しい現実を見せ、新しい感受性に目覚めさせてきたということである。

もしかしたらいま、40年前、20年前、いや、数年前のバラエティーを見ても、人々は笑ったり、驚いたりしないかもしれない。いくつかの例外はあるにしても、どうして当時、この番組が面白かったのか、たぶん私たち自身も思い出せない。若い人たちには見当もつかないだろう。しかし、そのこと自体が、私たちが変わり、時代が変わり、世の中が変わったことを示している。

日本でテレビ放送が開始されたのが1953（昭和28）年。それから56年、振り返ってみれば、テレビが、とくにバラエティーが人々の共通の関心事を作り出し、人と時代と世の中をじわじわ変えながら、その全体の求心力となってきた歴史は、じつは戦後に始まった民主主義の進展プロセスとも重なっている。

民主主義はときにはじれったく、退屈に感じられる制度だが、節目節目に国政や自治体の選挙によってはもちろんのこと、住民・市民・NPO等の活動によって、またライフスタイルや流行や文化によっても更新されることによって、面白く、活気あるものになってきた。そうした退屈さや面白さを感じ取る情動そのものが、多分にバラエティーによって育てられ、そのときどきのバラエティーの趣向や嗜好に大きく左右されてきたことを考え併せれば、バラエティーと民主主義は二人三脚、お互いの親和性は高いと言わなければならない。

ヘエ〜ッ、そうなんだア、などと、若い制作者のあなた、驚かないでいただきたい。そうなんだから。

### 3. バラエティーは腕白坊主か？

ところが、である。

民間放送には「民放連放送基準」というものがあるが、この手引書にバラエティーのことがどう書かれているかを見てみると、独立した項目としては——何もない！

報道や教育・教養といったジャンルには独立項目が立てられ、縷々記されているのに、ことバラエティーについては、ひとつもない。

ただし、この「放送基準」の各論に相当するところに、「公衆道徳を尊重し、社会常識に反する言動に共感を起こさせたり、模倣の気持ちを起こさせたりするような取り扱いはしない」「不快な感じを与えるような下品、卑わいな表現は避ける」「出演者

の言葉・動作・姿勢・衣装によって、卑わいな感じを与えないように注意する」などと、バラエティー番組を想定したらしい記述がある。

参考までに、日本放送協会（NHK）の場合も見ておこう。「日本放送協会番組基準」には「芸能番組」「娯楽番組」という項目があって、バラエティーに関係ありそうな事項として、「すぐれた芸能を取り上げ、情操を豊かにするようにつとめる」「放送の特性を生かした新しい芸術分野を開拓する」「家庭を明るくし、生活内容を豊かにするよう健全な娯楽を提供する」等とある。

NHKのように、バラエティーを芸能番組や娯楽番組に括っても間違いではないし、民放連のように、ときどき脱線するバラエティー的表現が視聴者の響感を買うことがないように、と心配する気持ちもわからないではない。

しかし、バラエティーがテレビならではのスタイルとジャンルを作り出し、いまやその手法がニュースや情報番組の制作・表現方法にまで浸透しているというのに、しかも、多様な意見やものの見方を行き交わせることで成り立つ民主主義との親和性も高いというのに、この扱いはちょっと可哀相ではないだろうか。

NHKの「番組基準」は、バラエティーを当たり障りなく「娯楽」「芸能」という枠内に押し込めているように見えるし、民放連の「放送基準」ときたひには、「あれをやっちゃいけない」「これに注意なさい」ばかりで、バラエティー制作者たちを励ますところが全然ない。まるで手を焼く腕白坊主の首根っこを押さえつけているみたいである。

\*

もっとも、バラエティー番組の制作者たちも、しばしば悪太郎ぶりを発揮し、そこで開き直ることもないわけではなかった。それどころか、けっこう頻繁にワルぶってみせるところもあったようである。

先の本にも、業界屈指のプロデューサーが放送作家たちに、面白いギャグやコントを書いてきたら、「うちの局はケチで金を払わないから俺が自腹で1本100万円払う！」と叫んだという逸話（もらった人はいなかったらしい）や、良識ある新聞に自分たちのバラエティーの批判記事が出ると、大喜びして、「この番組は当たります！」と断言したというエピソード（ホントに、大当たりした）などが載っている。

大ヒットしたバラエティー番組、先ほど、



私たちが懐かしく思い出したと言った数々のバラエティー番組も、そのいくつかは、「子供の教育上、いかがなものか」と、当時の世の親たちの眉をひそめさせ、「公序良俗に反する」としてやり玉に挙げられたものだった。そこには「社会通念」や「秩序」を笑い飛ばし、「権威」や「権力」をおちょくって、ときにはブチ壊すパワーがあった。

まさに変化、多様性、変わり種。当たり前のようにあった現実をひねったり、ゆがめたり、こねくりまわして、ちがう現実を作り出してしまうパワー。何でもありとは、そういうことである。

違法、非合法のことは論外としても、あとは常識と非常識、秩序と混沌、嘘と真実、美と醜、本物と偽物、既知と未知、その他とその他のすれすれのところで、バラエティーの制作者たちは知恵と悪知恵を絞り、七転八倒、悪戦苦闘し、顰蹙を買ったり、まぶしく見上げられたりしながら番組を作ってきた。

ゴマンといた制作者や作家のなかには、誰かの「つまんねえよ」のひと言で「発狂した奴、行方不明になった奴、荷物をまとめて田舎へさっさと帰った奴、物陰から石を投げつけた奴」など、種々雑多な人たちがいた。

それだけみんな、ひたむきに「真面目だった」し、その仕事は「面白くも辛い、楽しくも切ない、馬鹿々々しくも充実し」たものだった。そうやって制作されたバラエティーに、私たちは反応し、ファンになってきたのではなかったか。

カタいことを言えば、表現の自由も表現の冒険も、こうした涙ぐましい努力、危なっかしい奮闘によって、押し開かれ、人々を惹きつけ、少しずつ当たり前になり、定着してきたものである。

#### 4. バラエティーは危機なのだ！

だが、しかし。

これだけガンバってきたバラエティーだが、先の本の後半、というか最近の話になるにつれ、関係者の口調はだんだん愚痴っぽくなる。その気配が漂い始める。

曰く、バラエティーはあらゆることをやり尽くし、いまや何を見ても、既視感がつきまとう。

曰く、タレントとその予備軍は相変わらず少なくないが、突出したカリスマ的才能、ビッグな芸人が少なくなった。過去に大ヒットして、「お化け番組」と呼ばれたようなバラエティーは、制作者とカリスマ、テレビ局とスポンサーが一体となって作り上げてきたものだったが、いまそういう熱気が見当たらない。

曰く、放送界にコンプライアンスを矮小化した事なかれ主義、サラリーマン的保身がはびこって、ムチャなこともできなくなったし、破天荒なカリスマの存在も許されなくなった。それが、「やっちゃいけないことが面白く」「世の中に衝撃を与える快感」

に満ちていたバラエティーを生きにくくさせている。

曰く、不況になるとバラエティーが増えるのはもともとだが、最近、昔のように手間暇かけて作り込んだバラエティーの出る幕がどんどん減っている。放送作家不要、セット不要、安いギャラ、持ちネタがあって、リハーサル不要の若い芸人やタレントを集め、あとは話のうまい司会者を置きさえすれば一丁上がり、のようなものが多い。

曰く、バラエティーの制作者も、旬の芸人やタレントのキャスティングができるというだけの、要領のいい連中ばかりが跋扈しているんじゃないか。

……だと。

ほんとに大変なんだ、いまのバラエティーは。

関係者諸賢にも、思い当たるところがあったりして……。

\*

ここに漂っている閉塞感は、おそらくバラエティーだけの問題ではない。バラエティーが民主主義の進展と二人三脚、人と時代と世の中に寄り添い、動かしてきたことを考えれば、同じことが、いまの人と世の中の側についてもそっくり当てはまる、ということであろう。

経済の先詰まり感、政治の停滞感、行政の不透明感、国際情勢の不安定感、地域の尻すぼみ感、家庭の孤立感……。21世紀最初の10年間、私たち一人ひとりはいこうしたさまざまに気を滅入らせる現実で囲まれて暮らしている。それぞれがなぜ起きた



のかわからないまま、誰もがこれら幾重にも押し寄せてくる閉塞感を肌身に感じながら生きている。

こうした現実で巻き込まれまいとすれば、気の合う者同士、小さく固まって、せいぜい内輪の話題で盛り上がり、憂さを晴らすことくらいしかやることがない。面白くない出来事、不愉快なノイズ、癩に障る連中のことなんか知ったことか。無視を決め込むか、イジメてやって、せせら笑ってりゃいい……とばかりに、あっちでもこっちでも

サディスティックな冷笑的気分が湧き上がり、広がっていく。

この小さくまとまった冷笑的気分というものは、見かけほど冷めていなくて、あつというまに匿名集団化し、少数意見や異物の排除に熱狂することがあったり、マスコミの場合には、ターゲットにした人物や現象を突き放し、吊し上げるような集団的過

熱取材や集団的過剰同調番組となって暴走することがある。これもまた、この時代と社会で起きていることである。

そんな世の中で、個々人と、個々の家庭と、個々の職場が差し当たってできることといったら、なるだけムダを省き、世間の非難を浴びることのないようクビを引っ込めていること。それが、昨今流行りの「コスト削減」と「コンプライアンス強化」の縮み志向ということなのかもしれない。

世の中の方がこんな調子では、バラエティーもなかなか大変である。二人三脚はパワーになるときもあるが、ダメなときは両方が互いの足を引っ張り合って、ズッコケる。

それでも、制作者たちはこもごも言っている。

曰く、バラエティーは本来の「何でもあり」の猥雑さを失ってはいけない。

曰く、バラエティーは毒をなくしたらおしまいだ。

曰く、テレビには「この場所は、ちょっとアブナイことをやってもいい」という「悪所」が絶対必要なのだ、と。もちろんその悪所とは、バラエティーのことである。

心意気やよし。

しかし、何を、どうやるのか？

\*

ふーっ。

以上、ところどころで先の本から引用しているが、これはほんのサワリである。それも筆者や発言者の意図におかまいなく引っ張ってきて、ずらしたり、外したりして、委員会で議論してきたことに重ね合わせている。その辺は、バラエティーの得意技の見よう見真似、どうかご海容くださいますよう。

興味と関心のある方は、ぜひ現物に当たっていただきたい。

さて。

そろそろ、「あれ」である。

「あれ」の話です。

では、CMです。

ハイ、BPOの。

## 5. 視聴者意見と委員会

BPOには電話やファックス、手紙や電子メールで、視聴者からの意見や苦情がたくさん寄せられる。キー局の番組についてのものもあれば、ローカル局の番組のものもある。視聴者対応の専門スタッフは1日中、電話に張りつき、根気強くメモを取っている。

傍で見ているだけでも大変な仕事だが、これこそ委員会の活動の基盤である。ここ

で収集される情報がなければ、視聴者が個々の番組について、また放送局や放送界の現況についてどう思っているか、具体的なところがわからない。

もちろん各放送局にも、視聴者意見は寄せられている。それらに基づいて、あるいは局独自の判断で、内容の変更や訂正を行った番組もある。委員会へも、その主要なものに関しては、報告の形で送付されてくる。

私たちは委員会のたび、こうしたさまざまに集められる視聴者意見に目を通し、必要に応じて番組DVDを見ながら検討することになっている。場合によっては、当該局に問い合わせることもあるし、審議や審理のテーマにすることもある（視聴者意見の主なものについては、BPOのホームページ（<http://www.bpo.gr.jp/>）や、定期的に発行している『BPO報告』を参考にしていきたい）。

\*

委員会発足以来、さまざまな議論をかさねるなかで、私たちが気にかけてきたことのひとつに、いわゆる「バラエティー問題」があった。

「出演者の誰々が、こんな非常識なことをしゃべって（やって）いた」「この番組でこういう映像を流していたが、不適切ではないか」「この時間帯に、こんな内容を放送をしているのか」等々と寄せられる視聴者意見に、バラエティーに関するものが少なくなかったからである。

出演者にとってはジョークや冗談、その場のはずみでしゃべったり、罪のないおふざけのつもりでやったことかもしれない。あるいは制作者は、「バラエティーは報道番組ではないのだから、事実や出来事を多少誇張したり、ゆがめたりすることも許されるはず。正確さより面白さが命だ」と思って作ったかもしれない。

しかし、視聴者は必ずしもそう受け取っていない。冗談やジョークやユーモアが「度の過ぎた悪ふざけ」や「イジメ」に感じられ、面白さを目指したはずが、「下品」や「でっち上げ」に受け取られるということが起きる。それも、かなり頻繁に起きている。

とりわけ委員会が残念に思うのは、視聴者からの指摘によって、訂正やお詫びや釈明をせざるを得なくなったバラエティー番組が実際にいくつもある、という事実である。

\*

ここからが、いよいよ「あれ」の、具体的な話になる。

第1に、いま世の中で、バラエティーのどういうところが嫌われているか、ということを見ていくことにしたい。そのために、この1年ほどのあいだにBPOに寄せられた視聴者意見や各放送局から送られてきた報告事例等を5つに分類し、手短かにまとめてみる。

第2に、そこから浮かび上がってくる現在の視聴者像について考えたい。視聴者の

価値観の多様化ということは従前から何度も指摘されてきたが、ここではそれをもう少し具体的に見ておくことにする。

そして、これらを踏まえて、「これ」の話に移る。

それが第3で、放送局と制作者がこの多様化した世の中に向けて番組を、とくにバラエティー番組を送り出すとき、どういうことを心がけて仕事をしていただきたいか、委員会の考えを述べてみたい。冒頭でも言ったように、テレビは視聴者とのあいだにあらたな、堂々とした公共空間を作り出してほしい。ここで述べることは、そういう私たちの期待である。

さア、イッてみようっ。

### Ⅲ バラエティーが「嫌われる」5つの瞬間

「このバラエティーのここがいやだ」「こういうバラエティーはやめてもらいたい」という視聴者の意見は、概略、次の5つに分類することができる。

- 1 下ネタ
- 2 イジメや差別
- 3 内輪話や仲間内のバカ騒ぎ
- 4 制作の手の内がバレバレのもの
- 5 生きることの基本を粗末に扱うこと

1から3は、わかりやすいだろう。4もむずかしくはないが、このごろは案外多いのである。

しかし、5については、少し説明がいるかもしれない。何を切実な「生きることの基本」にするかは、人によっても、生活環境や価値観によっても千差万別であり、一概には決められない。にもかかわらず、視聴者意見のなかには、「生きることの基本を粗末に扱うこと」としか分類できないようなものが、確実にある。これについてはのちほど、もう少し詳しく見ていくことにする。

一々の放送局や番組や出演者の名前は省略するが、思い当たる制作者は、ここで指摘されていることが「誤解だ」「深読みのしすぎだ」「見当外れだ」「もっとちゃんと見てほしい」等々と反論したい気持ちもあるかもしれない。

だが、これはあくまで視聴者が「バラエティーのこういうところがいやだ」と言っている全体の傾向がどんなものかを概観するための作業である。どの局、どの番組のことを言っているのかなどという下世話な詮索はやめて、現在の視聴者像を探るための手がかりとして、お目通しいただきたい。



## 1. 下ネタ

女性出演者の水着姿の写真を団扇にし、その股の部分に開けた穴に指を入れてあおぐ形にしたものを、番組のなかで配っていた。子供も見る番組なのに、信じられない。女性の体を蔑視した放送で、こういうことを平気でやる風潮が、女性を対象とした凶悪事件の土壌になっているのではないか。

タレントの1日に密着という企画で、宇宙人がそのタレントにインプラントしたとかいって羽交い締めにし、下半身局部の写真を撮っていた。また、楽屋で着替えているタレントの全裸のうしろ姿を隠しカメラで撮影し、放送した。子供も見ているゴールデン帯の番組で、このような卑猥な番組は放送しないでもらいたい。家族で見ている、不愉快になった。

渋谷の駅頭で女性100人にアンケート調査をしたとあって、「〇んこ。〇のなかに入る文字は？」のランキングを放送していた。1位「う」、2位「あ」、3位「ち」、4位「い」、5位「ま」、6位「わ」……だそうだが、1位、3位、5位は下品で、放送に適さないのではないか。

タレントが司会する番組のコントのひとつで、トランプの手品をしていた。その際、タレントはトランプに女性器を表わす図を描いて、マークにした。相方が「こんなマークはつけないようにっ」と笑いながら言っていたが、放送でやるようなことではない。子供たちへの影響が心配だ。

司会のタレントが9歳の天才卓球少女と対決するコーナーで、タレントはズボンのチャックを下ろし、そこからピンポン球を取り出すなど、卑猥な行為や言葉を連発していた。大人の大人が9歳の子供を相手にする言動ではない。

## 2. イジメや差別

司会役のタレントが、黒人の演歌歌手に、「顔、黒いな。何をつけたんや」と言っていた。皮膚の色をからかうなんて、最低だ。

ミュージシャンのサクスを預かり、本人の知らないうちにシャワーヘッドとして利用し、それを見たミュージシャンが泣くのを、まわりのみんなで笑う、という場面があった。仮に、事前の了解があったとしても、楽器を大切にしない、人を泣かせて笑う、という映像

は醜くて、見ていられなかった。

出演者がトークしながら、アメリカの黒人はテレビを盗む、銃をよく使うというような映像を流し、黒人に対する偏見や人種差別をあおるような番組をやっていた。黒人に関する悪いイメージを故意に放送したとは思わないが、もう少し人種問題に敏感になった方がいいと思う。

手錠をかけ、動けなくした芸人を熱湯に突き落とす。女性出演者を足蹴にする。スタッフをパンツ1枚にして、真冬の戸外に出す。無口な女優を追い詰めて、言葉責めにする。芸人にビニール袋をかぶせ、隙間からスプレーを噴射し、息ができないようにする。こういう場面を、まわりの出演者やスタッフが手を叩き、はしゃぎながら見ている。イジメを助長するどころか、悪意の塊にしか見えない。ゴールデンタイムに放送するのは、ひどすぎる。

芸能人の運動会の番組で、先輩格のタレントが女性芸人をからかい、背後から胸をわしづかみにして揉むシーンがあった。彼女はその手を払うことはしなかったが、嫌な表情を浮かべていた。これは芸能界の上下関係を嵩に着たパワハラ、セクハラではないか。こんなことをするタレントもタチが悪いし、こんなシーンを放送する局も悪い。



### 3. 内輪話や仲間内のバカ騒ぎ

タレントがお笑い芸人所有の車にペンキを塗りたくったり、その車を運転して芸人を追い

かけ回していた。脚にぶつかっただけですんだが、危険だし、意味のない低俗な笑いにしか思えない。(局に電話して、担当者に聞いたら)「あくまで演出上、芸人所有の車にただで、実際はちがう」と言われ、啞然とした。

番組中、タレントのキャスターが、不倫騒動を起こしてバッシングを受けている女性出演者に向かって、「就職先を探してやる」「ウチにこないか」などと馴れなれしく話しかけていた。公共の電波を私物化している。こんなキャスターは辞めさせるべきだ。

スタジオ番組で、「ニューハーフのオッパイを絞ると母乳が出るか。出た母乳を濃縮し、バター状に加工したものをトーストに塗って、食べることは可能か」という愚劣な実験をやっていた。以前にも同じ番組で、「小鼻の脂でステーキを焼くことは可能か」という実験をやっていて、気持ちが悪かった。こんなくだらないことで出演者たちが大騒ぎする番組を流す放送局があることが、情けない。

バレンタインデーの企画という番組で、タレント出演者を「チョコフォンデュ」にする場面があった。溶かしたチョコを頭から流される様は、見るに堪えない光景だったが、他の出演者は手を叩いて喜んでいて、行き過ぎた内容ではないか。

先輩芸人が後輩の芸人に、「オマエの自宅に連れていけ」「嫌ならバリカンで髪を切る」と迫り、自宅に行くと、勝手に高額な商品を注文し、飲み食いし放題。傍若無人のふるまいをして、泊まらせてもらうという企画だが、出演者同士、事前に納得した上でのことであっても、行き過ぎた内容だと思う。



#### 4. 制作の手の内がバレバレのもの

米国のオバマ大統領候補（当時）によく似た芸人が選挙運動中の本人に近づき、「オバマ本人に、そっくりさんとして認めてもらう」という企画があった。芸人が「My name, Obama! My name, Obama!」と叫ぶと、オバマ候補は当惑して、「Oh, is that right?」と答えていたが、字幕は、芸人「僕はオバマですか?」、本人「君はオバマだ!」と、オバマ本人の公認を得たかのようにになっていた。そのビデオ映像を見て、スタジオはお祭騒ぎだったが、これは意識どころか、英語のわからない出演者や視聴者をだます捏造ではないか。

深夜のトークバラエティーで、2人のタレントが街頭で通行人の年齢や出身地を当てる企画。制作スタッフが通行人になりすまして、出演していた。視聴者が、その通行人と同じ名前が番組最後のスタッフロールにも出ていることに気がつき、放送局に問い合わせたことから、問題化した。

引退したプロ野球投手が「疲れていて、投げたくなかった試合」のエピソードを話したとき、野手たちが心配して、彼を囲んでマウンドに集まった様子が映し出された。しかし、それは別の球場の、別の試合のときのシーンだった。その後、当の試合の映像にもどって、2三振を取るのだが、話と関係のない、まったく別の映像を挿入して、断わりもなく、そのときの映像のように見せるのは虚偽放送ではないか。

バラエティー番組で観客の笑い声や驚き声を効果音のように入れることがあるが、だいたい観客など入れてもいないスタジオや会場の収録なのに、このような効果音を入れる必要があるのか。わざとらしいし、はっきり言って、音による捏造だと思う。

インターネット上の情報の真偽を検証するといって、情報のもととなったブログ画面を映しながら、「地下鉄にカーブが多い理由」「サケとシヤケのちがい」等々について出題するクイズ形式の番組があった。しかし、そのブログは実際には存在せず、制作者が番組のために作ったことが、視聴者の指摘で発覚した。

自転車通勤・通学を取り上げた番組中、リポーターが歩道を走る自転車の速度を測っていたが、最初の1台が時速40キロ、9台の平均速度が34キロだと放送していた。34キロは高校生の100メートル走の日本記録に匹敵するが、とてもそんな速さで走っているようには見えなかった。また、中年女性が惰性で走行する速度についても、33キロと言っていた。プロレーサーが少し力を抜いて走る速度が35～40キロだから、ママチャリ

では絶対そんな速度は出せない。計測ミスか、計測機器の故障か、あるいは自転車を故意に危険なものだというためのウソではないか。



## 5. 生きることの基本を粗末に扱うこと

小学生の男の子が給食のパンを喉に詰まらせて亡くなる、といういたましい事故があった。そのお子さんはテレビ番組の真似をして早食いを試みたという。そのような事故を教訓に、番組から「大食い」「早食い」の企画は姿を消したと思っていた。ところが、ある局が大食い番組を3時間にもわたって放送しているのを見て、私は呆れてしまった。

冒頭、局アナや出演者が喪服を着て並び、「今日未明、歌手のKさんが亡くなりました。今夜は予定を変更して、追悼番組をお送りします」と言った。ビックリして、友だちともメールのやりとりをしたが、数分後、おふざけであることがわかった。視聴者を驚かせて画面に釘付けにさせようという魂胆が姑息であるだけでなく、これは人の生き死にをもてあそんでいる。死を笑い事として扱ってほしくない。

グラビアアイドルが「暖房を消し忘れ、つけっぱなしにしたまま海外ロケに行ったのだが、その分の電気料金を払わない、と電力会社に30分にわたってクレームの電話をした」と得意満面で話していた。本当だとしたら、幼稚でわがままで非常識というにすぎない。さすがに他の出演者も「これは放送できないだろう」と言っていたのに、堂々と放送していた。

お笑い芸人やスタッフが川のなかにバシャバシャ入っていき、国の天然記念物に指定されているオオサンショウウオを追いかけ回し、網で捕獲していた。「特別の許可を得ています」とテロップが出ていたが、出演者の大はしゃぎばかりが目立って、どういう意図があるのかわからない番組だった。画面から場所の特定もできそうで、心ない人たちのいたずらを誘発しそうだった。天然記念物である生き物をこんなふうに乱暴に扱っていいなどという許可は、誰が出したのか。テレビ局の見識を疑う。

学校を舞台に、若いタレントたちが先生と生徒になって、授業のように雑学コントをやってみせる番組で、先生役のタレントがヒトラーのことを、「演説上手で国民の心をつかんだ。その口調は癒しがある揺らぎのリズムで、国民は惹きつけられた」などと紹介し、世界の偉人として取り上げていた。視聴者からは「いくらコントでも、歴史認識のひどさは目に余る」「制作者もタレントもまったく無知だ」等々のクレームが相次いだ。

\*

以上、BPOに寄せられた視聴者意見等を5つにパターン化し、例示してみたが、分類は便宜的なものであり、ざっと読んでもわかるとおり、ものによっては他の分類とかさなるものもある。

こうして並べてみると、いったいどういうときにバラエティーが視聴者からいやがられているか、おおまかな傾向はうかがえると思う。

さて、問題はここから何を読み取るか、である。



## IV なぜ、コレが嫌われるのか

### 1. 「つまんねえよ」と視聴者は言う

「下ネタ」「イジメや差別」の項に挙げられたような事例は、かつてなら収録や編集の段階で「つまんねえよ」のひと言で一蹴されていたのではないだろうか。

このぞんざいな物言いは、前の方で紹介した本にあった言葉の拝借なので、悪しからず。昔、バラエティーは、あまたの制作者や放送作家や出演者がよってたかって競い合い、夢中で作っていたが、誰かの「つまんねえよ」のひと言で、多くの関係者が自信を失い、脱落していった、という話のなかで出てきた台詞だった。

「下ネタ」は、たしかに、時と場合によっては面白い。けれども視聴者は、それは公衆の面前でやってみせることでもなければ、面白がるものでもないことを知っている。ましてそれをテレビでやって、子供に見せるのはいかがなものか、無理して見せるのは、大人としてみっともない、と言っているのである。

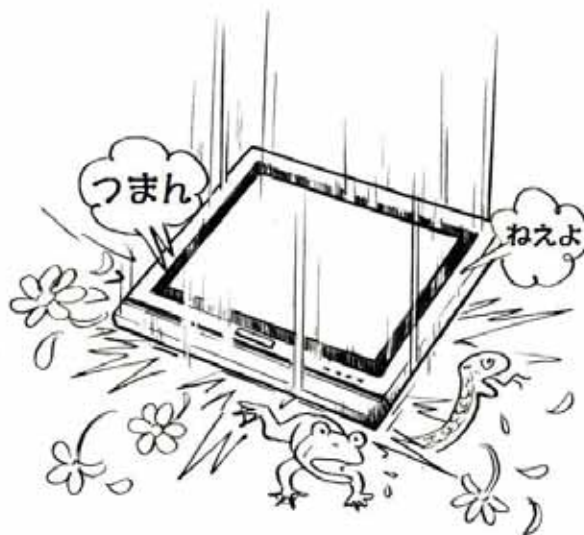
「イジメや差別」もそうである。

いまどき顔が黒いといって囃し立てたり、イジメまがい、セクハラまがいの台詞やアクションで笑いを取ろうなんて大人げないし、みっともないし、そもそも芸がない、と視聴者は見抜いている。

経済も政治も文化もグローバル化し、日々、人種・民族・宗教による差別が紛争や戦争まで引き起こしている世界の現実がいやでも目につく昨今、相変わらずローカルに閉じこもり、ちまちまはしゃいでいるのは、いまやこの種のバラエティーだけじゃないかと憐れんでいる気配すら、ここにはある。

はっきり言って、遅れているのである。イジメや差別は昔もあったし、いまもある。それがいいというわけではないが、シチュエーションも手口も、現実の方がもっと生々しく、ずっと先にいっている。そのことの深刻さを知っている視聴者には、画面のなかの出演者がままごとをやっているようにしか見えないし、あるいは深刻な現実には単に追随しているようにすら感じてしまう。

「内輪話や仲間内のバカ騒ぎ」となると、そんなの、ウチで勝手にやっててください、テレビでやらなくていいです、と突き放している。ここでも、どうせ打ち合わせ済みだとしても、大の大人がガキっぽいイジ



メまがいのドタバタを演じてみせることもあって、そういうどれもこれもが、幼稚、たわいない、みっともない……。

これもまた、古いのである。いまだにそんなことを面白いと思うセンスでバラエティーを作り、出演しているのか、ということである。

画面のなかのはしゃぎ廻りに、視聴者は全然加わっていない。加わる意思がない、というより、そもそも最初から番組の仕掛けや演出やネタが視聴者がノレないものになっていて、さらに悪いことに、そのことに制作者が全然気がついていないらしい「鈍感さ」が画面から漂ってくる。

嫌う、もさることながら、視聴者はここでは、呆れている。

これらが総じて、「つまんねえよ」である。

と、こう書くと、現場方面から「そんなことを言われても、数字（視聴率）は取ってるんだよっ」というムキになった反論がもどってきそうだ。

ごもつとも、である。だが、いま問題にしているのは量ではなく、質である。とりあえずここでは、ここに挙げたようなバラエティーをつまらないと感じる視聴者意見が少なくないという事実を押さえておこう。このあたりのノレなさ加減のことは、もう少しあとで再び取り上げてみたいと思う。

かつて送り手のあいだで、もっと面白く、もっと毒を、もっと悪所を、と切磋琢磨し合うなかで吐かれた言葉が、いま視聴者から、上記の各種バラエティーに向かって、けっこう頻繁に使われている。はっきりいってこれはレッドカード、即退場である。

なぜこんなことが起こっているのだろう。

\*

いやいや、そんなにムクれないでよ～。

何度も言うようだけど、これは視聴者意見であると同時に、先ほど来、参考になっている『テレビ作家たちの50年』で、バラエティー制作のベテランたちも言っていることなんだから。

そこに少しばかり委員会が手を加え、ズラしたり、誇張したり、単純化して、わかりやすくした話。いつもバラエティーがやっていることです。

それにしても上で見た各種バラエティーには、いろんなタイトルがついている。芸能バラエティー、クイズ・バラエティー、トーク・バラエティー、アイドルタレント・バラエティー、情報整理バラエティー、ニュース・バラエティー……。

次々に新形式や新ジャンルを開拓し、創造と破壊を繰り返すバラエティーの伝統はいまだ健在らしい。けれども、私たちの理解するところでは、制作者が新しい形式を考案するとは、これまでとはちがう切り口と内容で視聴者の情動を刺激し、従来にはなかった共感を作り出すことであり、いわば新しい「窓」を開くようなものであろう。





むろんそれには、カタチばかりでなく、内容も考えなければならない。いや、先人たちの話では、中身こそ命だった。彼らは景気づけのウソを承知で、「ギャグ1本100万円！」のエサに釣られ、無我夢中で脂汗をかき、知恵と悪知恵の両方を絞るようにしてバラエティーの中身を考えた。中身を考えることが、カタチを作ることであり、それが「作り込む」という言葉の意味だった。

ところが、それがいま、視聴者からの「つまんねえよ」の連発で、突き放されてしまうとは、どういうことか。せっかく考えた形式、一生懸命開いた窓の向こうに視聴者がいなくて、その窓ガラスに仲間内ではしゃぎ廻る制作者と出演者自身の姿が映っているだけ。窓のはずが、単なる「鏡」になっているようなことはないだろうか。

あるいはひょっとして、制作者は、形式は考えた、あとはたくさん集めたタレントや芸人やアイドルのアドリブと瞬間芸、はしゃぎぶりとノリのよさ、才能と才覚にお任せ、ということなのだろうか。

それだけのことなら、バラエティーが昨今の制作コスト削減、お手軽・安上がり番組の尖兵に使われている、というにすぎないのではあるまいか。

\*

いやー、ごめんごめん。きついこと言っちゃった。

だって、これってバラエティーだからさ。

うん、検証バラエティー。

## 2. 視聴者は素人ではない

つづいて、「制作の手の内がバレバレのもの」である。

内閣府の調査によれば、日本のビデオカメラの世帯普及率は4割を超えている（08年3月現在）。最近では、たいていのデジカメに動画撮影機能が付属している。同じ機能は携帯電話にもある。動いている被写体を動いたまま撮影し、同時にその場の音声を収録する行為は、いまや珍しいことでも何でもない。

ここから先、パソコンを使い、ストーリーに沿って撮影素材を編集し、そこにブツ撮りや資料撮りした映像を挿入し、ナレーションやスーパー、音楽や効果音をつけ、おしまいにスタッフロールを入れて、作品として完成させることまでやる人もけっこういる。そのためのPCソフトも安価で出回っている。動画投稿サイトには手の込んだ

だ編集をした作品がゴマンとある。

そこまでやらないまでも、街角にも車内にもさまざまな映像があふれ返っている世の中である。たえず私たちはリアルとバーチャルの境目を、無意識のうちに意識しながら(!)暮らしている。いまどきの視聴者なら、番組がおおよそどういうカラクリで作られているかの見当くらいはつけられる。

これは、映像を見る人々の意識に変化が起きている、ということである。手近な道具によって撮影や編集という行為に少し慣れた人であれば、何が事



実であり、何が加工によって可能になった映像かを体験的に知っている。番組の都合で事実手を加えたり、ごまかしたりすれば、たちまち見抜くだろう。内容に引き込まれない番組を見ているときほど、制作の手の内が透けて見えてしまう。

\*

もし視聴者が、そこそこ英語のできる人だとしたら、どうだろう。いまどき、そういう人は全然珍しくない。英語教育の開始が低年齢化している近年、その層はますます広がっている。中国語、ハングル、スペイン語、フランス語の達人もたくさんいるし、マイナー言語を得意とし、勉強している人たちもいる。

字幕スーパーではごまかせない。番組を面白くするために極端な意識をすれば、即座に誤訳だと言われてしまう。捏造と批判されても、言い訳が立たない。

また視聴者が、何かの専門家や業界人だったら、どうだろうか。ある分野や趣味のマニアだったら、どうだろうか。

経済が高度に発達し、情報化が進化した社会では、誰もが何かのプロやマニアや事情通として暮らしている。政治や経済や法律のプロ。金融やマネーゲームや貿易のプロ。学問や技術や製造のプロ。都市計画や不動産や建築のプロ。商業や農業や漁業のプロ。スポーツや文化や教育のプロ。ファッションやグルメやインテリアのプロ。国際問題や環境問題や社会問題のプロ。遊びや家事や消費もそれ自体、立派なプロとして成り立っている。

何かの専門家、あるいはマニア、あるいは事情通——そういう自負がなければ、誰にとってもこの世の中は面白くないし、やってもいけない。そのくらいの覚悟と真剣さで、一人ひとりの生活者は生きている。

世の中には、視聴者一般がいるのではない。一人ひとりが何かのプロ、マニア、事情通として暮らしていて、たまたまある時間、テレビをつけ、バラエティー番組を見

て、視聴者になる。そのとき自分の仕事、馴染んでいる世界、よく知っているジャンルのことが出てくれば、じっと目を凝らして見るだろう。

\*

こういう視聴者に比べて、放送界で働いている人、番組制作者はいったい何のプロということになるだろうか。もちろん放送と番組制作のプロである。だが、いちばんよく知っている業界をテーマに番組を作ることはめったにない。たとえ作っても、そればかりやるわけにもいかない。

バラエティーは、諸事万般、森羅万象、何でもありの番組スタイルである。しかし、制作者は何を取り上げて、その分野、その歴史、その事象について、専門家でもなければ、当事者でもない。はっきり言って、企画立案の当初は誰もが素人である。

バラエティーに限らない。マスメディアで働くということは、取り上げるテーマについて、いつでもゼロから始めるということである。いろいろ読んだり見たり調べたりし、当事者や関係者や専門家の話を聞き、それらをもとに自分で考え、行きつ戻りつしながら組み立てていき、番組や記事や作品としてアウトプットする。

この最後の段階に至ってようやく、制作者はプロのレベルに近づく。そのために必死で調べ、勉強する。この繰り返しが、知識や経験として蓄積され、カンやセンスとして磨かれ、構成力や表現力として鍛えられていく。

であってもなお、自分は何のプロでもないし、当事者でもない、という自覚は失ってはならないものではないだろうか。そうでなければ悪ズレし、傲慢になって、それこそバラエティーが揶揄し、笑いのめす類の嫌味な性格になってしまう。

ともあれこうして、さまざまな試行錯誤と試練と努力を経て表現したものが、プロやマニアや事情通の目にさらされる。専門家の目にさらされても、耐えられる中身になっているかどうか。マニアや事情通が見ても、「なるほど、こうきたか」と唸らせることができるかどうか。制作者の腕はそこにかかっている。

\*

バラエティーとて、同じことである。

事実の間違い、ごまかし、ご都合主義の辻褃合わせは、たちまち視聴者に、つまりは各分野それぞれにいるプロやマニアや事情通の視聴者に見透かされてしまう。面白さとわかりやすさはバラエティーが目指すべき絶対の価値ではあるが、そのための誇張・単純化・省略の仕方についても、視聴者は、送り手の理解力や表現力やセンスの善し悪しとして、敏感に読み取っていくだろう。

視聴者に、「この番組、この制作者の程度はこんなもんか」と見抜かれること、「なーんだ、テレビなんて、ズブの素人が作ってるだけか」と見透かされてしまうこと。

きっと最大のバレバレは、これである。これこそいちばん避けなければならない事態であろう。

### 3. 生きることの基本を粗末に扱う、とはどういうことか

さて、次である。

これは厄介だ。

前にも言ったように、「生きることの基本」なんて人さまざまだから、委員会が議論したことを説明するのも手間がかかるし、バラエティー制作者にしてみれば、「何を粗末にしたら嫌われるか、具体的に言ってよ」と、ちょっと突っかかりたくもなるだろう。

先に例に挙げた視聴者意見をもう少し一般化して書き換えてみると、次のようになる。

- ・死を安直に扱うこと。
- ・食べ物を粗末にすること。
- ・社会生活の最低限のルールを破って平気なこと。
- ・自然を壊したり、動物を虐待すること。
- ・弱い人、気の毒な人たちをいたぶること。
- ・歴史の基本的知識や認識をないがしろにすること。

等々。

ここに挙げたのはサンプルであって、これがすべてというわけではない。言い方もさまざまなら、対象とする番組も、指摘する角度もちがう。意見を寄せた視聴者の年齢層も地域も性別もいろいろである。

ますますわからない？

いや、私たちが議論しながら、昔も視聴者の眉をひそめさせたり、顰蹙を買ったバラエティーというのは、食べ物を投げたり、踏みつけたりしていたし、他人の迷惑も考えず、習慣やルールをぶち壊したりしていたなァ、と思い出していた。それらの番組はけっこうそれで話題となり、人気を得ていた。

ところが、いまそれと同じことをやると、視聴者には嫌われるというのはどういうことだろうか。昔と現在のあいだで、何が起きたのか。

### 4. 昔、バラエティーは何を笑っていたのか

温故知新。

言わずもがな、かもしれないが、確認しておきたい。

たしかに昔も、「公序良俗に反している」「子供に悪影響を与える」「日本語が乱れる」等々と批判され、やり玉に挙がったバラエティーは少なくなかった。民放連の「放送基準」が、「あれをやっちゃいけない」「これに注意しなさい」とこまごま記しているのも、言ってみれば、その善後策の足跡のようなものかもしれない。

生きている人間を死んだことにして笑い飛ばすネタも、もちろんあった。しかし、それが笑いを取ったのは、相手が権威や権力の権化のような人物だったり、やたら学歴や肩書きをひけらかす嫌味なヤツだったり、家父長制度を嵩に着て威張り散らすオヤジだったりしたからではなかったか。彼らは脂ぎった俗世間のシンボルだった。

パイ投げや小麦粉かけやビールかけが面白かったのも、材料の意外性や、ぶつけられ、真っ白になり、びしょ濡れになった人物の人格が豹変することが面白かっただけでなく、その一瞬の光景に、その人物がしがみついていた社会通念や秩序の崩壊が垣間見え、それが視聴者に快哉を叫ばせたからでもあった。

ルール破り、掟破りにも、さしたる根拠もないまま幅をきかせていた世の中の約束事の無意味さを白日の下にさらす意義があったはずである。その意味がなくなると、おバカキャラは、ただの本当のバカ丸出しにしか見えなくなる。

\*

少し前で、「イジメや差別」について、簡単に触れた。

かつて身体や性格や社会的立場の特徴をからかったり、ときには責め立てることで笑いを取ることが可能だったのは、トリックスターや道化役もまた共同体の大切な一員であり、それなしには共同体のダイナミズムが失われてしまう、ということを経験した暗黙のうちに了解していたからではなかったろうか。

そういう了解のあるところでは、笑った者が瞬間的に笑われる立場に転がり落ちる逆転も可能となって、笑いはいっそう複雑化し、大人の笑いになった。

ところが、共同体のまとまりが崩れ、その了解が薄れてしまえば、それは単なる弱い者イジメにしか見えなくなる。逆転も起こらず、乱暴者は乱暴者のままである。たとえ互いに打ち合わせ済みのドタバタであっても、視聴者は、そこに弱い者イジメの陰湿さと、イジめる側の貧相な精神を読み取ってしまう。

問題は、制作者たちがこの間に起きた世の中の変化、人々の意識の変化をどう考え、それに対応しようとしているか、である。



## 5. 王様の笑い、庶民の笑い

笑いとは何か。笑いはどういうときに発生するのだろうか。

古来、笑いの研究はさまざまに行われてきたが、いまだ定まった定義はないらしい。親密さの表現とか、緊張の緩和とか、新旧の認識の落差から生じるとか、いろいろ言われているけれども、いずれにしてもそこにあるのは、「落差」や「ズレ」の感覚である。主体の側であれ、客体の側であれ、ある状態から別の状態への「ズレ」や「落差」が起きないと、笑いは生まれない。

これまで述べてきたことの延長で、少し図式化して言うと、既存の社会通念や秩序をおちよくり、権威や権力を笑いのめしてきたバラエティーは、庶民が「王様は裸だ！」とって笑うような類の笑いだった。

だが、テレビの前の視聴者が爆笑、哄笑したからといって、即座に王様がいなくなったわけではない。世の中はそれほど単純にはできていない。権威や権力は相変わらずどっしりと居つづけ、人々が通念や秩序に縛られた毎日を送ることに変わりはない。王様を笑う「庶民の笑い」のひとつひとつは、いわば一瞬の気晴らし、あるいはふと夢見るメルヘンのようなものであった。

だからこそ、バラエティーには存在意義があったということである。いつも押さえつけられてきた庶民が高らかに笑い、深く納得することができる一時があること。それが、世の中がかろうじて健康で、元気であることの証左になる。

そうしてその一瞬が何年も、何十年も積み重なり、世の中の政治や経済や文化の民主化と二人三脚で走ってきた結果、何が起きたかといえば、少なくとも王様は、昔のような姿では存在できなくなった。理不尽な権威、うざったい社会通念、封建的な秩序、等々の前近代性は、意味を失い、後景に退いていった。

\*

そして、いま。

かつての王様がいなくなってみると、王様を頂点に、良くも悪くも共同性を保っていた社会構造も解体し、人々はフラットな平面でばらばらに生きることになった。

こうした変化は一々の言葉、ひとつひとつの行為の意味も変えていく。かつての「愛のムチ」が「体罰」に、「トリックスター」が「弱者」に、「おバカキャラ」が「バカ丸出し」に転化してきた背後には、単なる受け止め方の変化にとどまらない、世の中の構造的変化がある。構造的変化が一人ひとりの受け止め方を変えてきた、と言った方が、正確かもしれない。

昔のような王様がいなくなってみる



と、庶民のなかから王様を気取る連中が出てくることもある。単に力があるだけの者、乱暴者、一時の時流に乗った者が、力の弱い者や下々の苦心惨憺ぶりを冷笑する「王様の笑い」を演じ始める。

これが、先に「イジメや差別」の項で見た陰湿な笑いである。

この冷笑はまた、もっと前の方で、世の中の閉塞感から「小さくまとまって匿名集団化しながら、少数意見や異物の排除に熱狂する」と指摘した、この時代の一定の気分とも密通しやすいだろう。しばしば冷笑が他者に冷たいまま熱狂し、攻撃性をむき出しにして暴走することは、幾たびか歴史が経験したことである。

いや、放送にはもっと身近な例もあった。広い意味でのバラエティー番組が集団的過熱取材や集団的過剰同調を批判されたことがある。おそらく制作者は面白く、わかりやすくと一生懸命、夢中で取材し、制作したにちがいないが、あのときみずからの内に、取材対象者を突き放し、ちょっと王様のような気分で冷笑し、断罪する気持ちがなかったか。

バラエティーが二度とこうした暴走の発火点になってほしくない。また、こんなネタを繰り返していれば、この世の中はますますすぎすぎすと、生きにくくなる。数多くの視聴者意見から、そのような願いを読み取ることはできないだろうか。



\*

それにしても、である。

フラットな世の中になって、本当に王様はいなくなったのだろうか。

もちろん、そんなはずはない。昔の王様は雲散霧消したかもしれないが、王様は姿形を変え、別の誰かや何かが取って代わり、相変わらず存在しつづけている。

そうでなくてどうして強欲資本主義やグローバリズムだの、エネルギー争奪や地球温暖化だの、テロや単独行動主義や王朝独裁だの、官僚主義や天下りだの、格差・派遣・リストラだの、少子化や過疎化やシャッター通りだの、DVや家庭内殺人や自殺

者3万人だのが次々と問題になるのか。なぜそのたびに世の中は縮み上がるのか。

こうしたものの背後に、あるいは根元にあって、世間と世の中と世界を采配している巨大な力は何なのか。それはひとつなのか、百なのか、千なのか。その正体をどうやって見抜き、どう名づけるのかについて、世界中の政治・経済の実務家たちとアカデミズムや芸術・文化のクリエイターらが考え、悩み、試行錯誤をつづけている。

だから、と委員会は言いたいのである。

バラエティーにはチャンスがある、と。

バラエティーは過去半世紀余、雲上の王様ばかりか、世俗にまぎれ込んだ王様まで見つけ出し、笑い飛ばしたり、面白く、わかりやすく正体を暴いて、からかってきた経験がある。その高等なノウハウを現代の王様探しに活かし、あらたな「庶民の笑い」を作り上げたら、上記各界人士を出し抜いて、はるか上をいけるかもしれない。

ちまちまと、ドメスチックなおふざけでお茶を濁している場合ではないのではなからうか。

## V バラエティーが成り立つ公共空間

### 1. テレビ本来の姿としてのバラエティー

気がつきました？

前の章の最後の方で話題にしたのは、昔のバラエティーはよかった、などということではない。そんなことでは全然なくて、バラエティーの送り手と受け手の関係の話である。マス・コミュニケーションとは何か、という問題である。

昔の視聴者は、いまのように新聞のラテ欄にテレビ局の電話番号など書いてなかったから、番組のあれこれについて、簡単に局に電話したりなどしなかった。もちろん、まだBPOの視聴者対応の窓口などカゲもカタチもなかった。それでいながら、テレビと、とりわけバラエティー番組と活発なやりとりをしていた。

それは、電話やファックスやメールがなくても成り立つ、バラエティーと視聴者のあいだの意思疎通である。送り手がギャグやコントやドタバタで、あるいはオシャレなトークやジョークに包んで送ったメッセージ、けっこうキツイ毒の入ったメッセージを、受け手はたしかに受け取って、面白がったり、驚いたり、気持ちを高ぶらせたりしていた。「ウケる」とは、このコミュニケーションの成立のことであった。

\*

しかし、ここで見落としてならないことは、これが送り手と受け手、1対1のあいだで完結する、閉じたコミュニケーションではなかった、ということである。



視聴者一人ひとりの背後には当時の世の中の仕組みがあって、そこには理不尽な権威やうざったい社会通念、封建的な常識や意味を失った秩序等々がぎっしり詰まっていた。王様は雲の上にいただけでなく、その意を汲んだ種々雑多な家来や手下が俗な世間のあちこちにいたということである。

おそらく誰もが、そういうものに従って暮らしていれば、波風も立たず、楽なことを知っていながら、「なんだかなー」とか、「そればかりでも面白くないなァ」くらいのことは考えていたにちがいない。

ここが人間の不思議というか、一筋縄ではいかないところである。どういうわけか人間は、ひとつところには留まっていない動物であるらしい。

バラエティーは、直接的には視聴者に向かって語ったり、演じたりしながら、間接的にはそのうしろにある世の中の仕組みと、そこに付随するもろもろの権威や通念を揶揄し、笑い飛ばし、おちよくっていた。視聴者に、視聴者一人ひとりを取り巻いている現実の表層を引き剥がしてみせ、見てくれとはちがう現実の相貌、変わり種の現実を見せていたということでもある。

当然、おちよくられた側からは、「子供に悪影響を与える」「公序良俗に反する」等々の反発もあった。反発も批判もコミュニケーションの一種であるから、当時のバラエティーは、こうして視聴者ばかりか世の中とも渡り合う二重三重のコミュニケーションの上に成り立っていたとすることができる。

\*

番組が送りっ放し（＝放送？ まさか！）ではなく、不特定多数のマスへの反応を引き起こし、送り手と受け手と世の中のあいだであれこれとコミュニケーションが成立すること、それこそマス・コミュニケーションの本来的な姿だった。

ここは、しっかり押さえておきたい。

テレビは、なかんずくバラエティーは、送り手と受け手で成り立っているが、受け手には、視聴者と世の中の2つがあって、この3つがくんずほぐれつ絡み合って、ひとつのコミュニケーション空間を作り出してきたこと。これがテレビが作った公共空間、テレビの公共性というものだった。

前の方で誰かが、「やっちゃいけないことが面白く」「世の中に衝撃を与える快感」と言っていた。これである。テレビの前の視聴者をワクワク、ドキドキさせ、ワーワー、キャーキャー言わせるだけでは十分ではない。世の中に衝撃を与え、揺さぶってこそ、バラエティーはバラエティーの毒を発揮し、制作者も出演者も大きな顔ができるというものだった。

とすれば、いまバラエティーは、テレビと視聴者と世の中とのあいだにどんなコミュニケーション空間を築いているだろうか。

## 2. いま、視聴者の現実が見えているか

「C」は4歳から12歳の子供、「T」は13歳から19歳のティーンエイジャー、「F (M) 1」は20歳から34歳の女性(男性)、「F (M) 2」は35歳から49歳の女性(男性)、「F (M) 3」は50歳以上の女性(男性)……。

放送界には、マーケティング理論を応用した視聴者層の分類がある。制作者は頭のなかで放送時間帯とターゲットとする年齢層の生活時間を組み合わせ、その視聴者層の関心を惹きつけるにはどうすればよいか、と知恵を絞る。とくに番組の訴求力を企業に売り込むことで収入を得ている民放には、ここは思案のしどころとなる。

しかし、いまどきの視聴者を世代と性別を大雑把にクロスさせて分類するだけで、その特性や嗜好の傾向性がわかるなどは、放送関係者自身が半信半疑にちがいない。

早い話、成人年齢から30代半ばまでのF1、M1である。

この層には、家族、学校、地域中心だった生活から世の中に出て、やっと自分の人生を始めたばかりの若者もいれば、子育てまっさかりの親になったり、もしかしたらもう相手と別れて、「20歳のころはよかったァ」などと、早々に「マイ古き良き時代」を懐かしんでいる風の人もある。と思えば、大学院や留学やボランティアの勉強や活動で忙しい人、オタク的趣味やファッションや恋愛に夢中の人、リストラや倒産でそれどころではない人もいる。兄弟姉妹や親戚とのあいだのもめ事で気の休まらない人、早くも親の介護で大変な人だっているかもしれない。

これらを一括りにして、特性なり傾向性を引き出すって、どうやってやるのだろうか。素人目にはまるで手品かアクロバットにしか見えないが、そこが現代マーケティング理論の妙ということなのだろう。

どうせなら血液型性格判断も加味したらいいのに、なーんて。

あ、本気にしないでねっ。

ここは、よーく考えてください。

詳しくは、民放連「放送基準」をご覧ください。

\*

要は、同じ年齢層でも、視聴者は種々さまざま。どころか、一人のなかで、3つも4つものものが並立したり、争ったりしているのがいまの視聴者である。

おまけに、前にも言ったようにこのごろは、気を滅入らせる閉塞感が四方八方から押し寄せてくる。経済の先詰まり感、政治の停滞感、行政の不透明感、国際情勢の不安定感、地域の尻すぼみ感、家庭の孤立感……。

これらはみんな、あらゆる年齢層に覆いかぶさってくる。こんなことばかり気にしていても何も始まらないが、厄介なのはどれもこれも、我が身の責任も多少は関わっているように感じられて、でも、自分だけではどうしようもできないことばかりということ。

鬱陶しい。落ち着かない。先が見えない。世の中、何が起きてもおかしくないし、何でもありかもしれないが……だからこそ、せめて最低限の、いちばん基本になるところだけは、自分なりにしっかりしておきたい――。



思い通りにいかない世の中でクビをすくめて暮らしていても、それだからこそ、大事にすべきことの2つ3つはいい加減なところで妥協せず、ちゃんとしておきたい――。

視聴者のあいだに、このような漠然とした思いが湧き上がっていないだろうか？

委員会が、たくさんの視聴者意見に目を通し、その意味するところを検討するなかで気づいたのは、これである。

かつての視聴者を取り巻いていた旧習・旧弊はずいぶん少なくなったかわりに、世の中に根を張った生活信条があるわけでもない。あるのは、あちこちから、ときには地球の裏側や近隣の国々からも押し寄せてくる巨大な力に揺さぶられているという実感。王様の姿は見えないのに、その乱暴な影響力だけはある。それに正面から立ち向かう方法を見つけ出せないまま、ぎすぎす、いらいらする世間の空気。そんななかでは、せめて「自分なり」に「生きることの基本」を決めるしかない……。

いわば感触のようなものではあるが、多くの視聴者意見からは、そういう人々の思いの存在が手応えとして、確実に伝わってくる。

それが、バラエティーが「嫌われる」瞬間のなかに、「生きることの基本を粗末に扱うこと」として括って示した視聴者意見の数々である。

ここからは、「バラエティーは不安な世の中で一生懸命生きている視聴者のことに、知らんぷりを決め込んでいるんじゃないか」と言いたげな声が聞こえてくる。バラエティーはこうした視聴者とのあいだにコミュニケーションの回路を開いているか。一人ひとりの視聴者の関心事に真正面から切り込み、世の中を揺さぶるような公共空間を築いているだろうか。

\*

委員会は、バラエティー番組制作者が視聴者一人ひとりの現実をしっかり目を向けていただきたいと考える。そこから新しいバラエティーを作り上げてほしい、と期待する。

むろん私たちも、憂き世のことを忘れさせてくれるひたすらナンセンスなバラエティーをときには見たいと思う。また、制作者が視聴率にこだわることも、視聴者分類

を意識することも大事だと思っている。

だが、そこからだけでは浮かび上がってこない視聴者個々のナマの気持ち。いったいいま、この世の中で、視聴者は日々、何を感じ、どんなことを思いながら暮らしているか。そういう切実な気持ちや思いを発生させているものの正体、人々の日常を条件付けているものの正体は何なのか。それこそ昔の旧習・旧弊にとってかわって、人々をがんにがらめにし、息苦しい思いをさせているもののはずである。

上に記したような視聴者の思いの先に、人間と世の中に関わる新しい考え方、新しい価値観や倫理、新しい生活様式が開けるかどうかはわからない。人間はなかなかじっとしていないから、そのうちにこれらとは縁もゆかりもない、とんでもない見方や世界観を作り出さないとも限らない。

だが、バラエティーと民主主義が二人三脚、古い権威や社会通念、旧習や旧弊を一掃したあとで、フラットになった世界、一人ひとりがばらばらに生きている世の中で、「自分なり」に発せられる意見の他に、新しい考え方や価値観や倫理の内容と方向性を知る手がかりはあるだろうか。

おそらくはたぶん、このちょっと先に、これからのバラエティーが視聴者とのあいだに共感・共振の窓を開き、世の中を揺さぶるような堂々としたコミュニケーション空間を作るステージがある。そう考えるのは、誇大妄想だろうか？

冒頭で言った、「これ」の話である。

いくら生きにくいといっても、私たちはクビを引っ込め、びくびくしてばかりはいられない。哄笑、爆笑、大笑いがないなんて、だいたいろくな世の中じゃない。笑えること、愉しめること、面白いことが少ないなら、バラエティーがそこに堂々と切り込んで、息苦しい世の中をひっくり返してほしい。

それこそが、委員会の期待なのである。

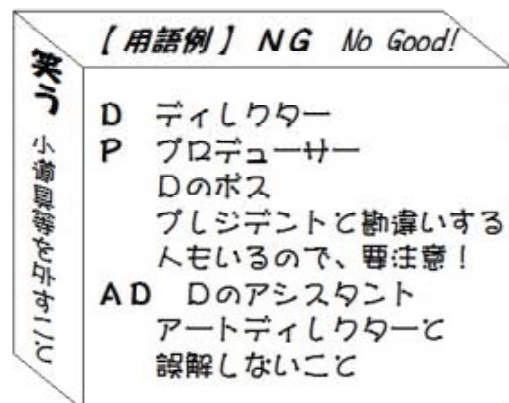
突然ですが、次は最終章です。

### 3. これまでのあらすじ

最終章。

これまでのあらすじ、です。

……DはADとPのあいだにいて、将来を囑望されていた。TやF 1、M1の仕事もできるし、F 2やM3をやらせてもそつがない。だが、クールでタフなDにも、誰にも知られたくないトラウマがあった。それがときどき疼いて、彼を引っ込み思案にさせていた。何でもこなせるが、顔のないD、それが彼だった。トラウマは、



出生にまつわる謎にあった。

……Dが幼少のころ、婆さんが言った。「おまえはね、どんぶらこ、どんぶらこと川を流れてきた桃から生まれたんだよ」。ウッソー、マジィ？ 子供のころは、その程度ですんだ。だが、いまや赤ん坊がどうやって生まれるかくらいは知っている年齢だ。オレの本当の両親は誰なのか、どこにいるのか。あの爺さん、婆さんは何者だったんだ。考えれば考えるほど、わからなくなる。

……婆さんは毎日、川へ洗濯に、爺さんは山へ柴刈りにいった。今風に言えば、山奥の限界集落。オレはキビ団子をエサに、犬と猿とキジと仲良くなって遊んだ。いまは仕事仲間がたくさんいるにしても、あの鬼ヶ島の鬼退治以来、本当に心を許せる友だちといえ、やっぱり彼らだった。

……ただ、連中はあの一件で味を占めてから、やたら騒動好きになってしまった。今日も、犬は「敵はコスト削減で攻めてきてますっ」、猿は「嵐だーっ。コンプライアンス強化の嵐がきたぞーっ」、キジは「BPOの委員会に気をつけた方がいいかもよ」と口々に言った。オレをけしかけ、また鬼退治にいこう、という魂胆なのだ。

……こいつらに騒がれると、トラウマが疼く。赤ん坊は川に流すし、見え透いたウソは言うし、人間はわけがわからない。それよりTだ、M1だ、F2だ、9.7%だ、13.6%だと、数字や記号を相手にしている方がどんなに気が楽か。数字や記号は何も主張しないし、嫌味も言わない。オレの出生の秘密をさぐるような真似もしない。

……誰かが「つまんねえよ」と言っていた。「下ネタとか、イジメや差別とか、仲間内のバカ騒ぎとか。あなたのバラエティーは、少しセコいんじゃないですか。おまけに、手の内がバレバレだから、目も当てられない。このごろの視聴者は何につけ、専門家やマニアや事情通ですからね、みんな見抜かれています。全然、ノレないんです。あなたも少し考えてくれないと困るんですけど」とか、なんとか。



……Dは内心、ムツとした。あれは絶対、ただのバカ騒ぎやイジメじゃなかった。鬼どもが暴れまわり、近隣の村々も困り果てていた。婆さんからその話を聞いて、オレは許しちゃおけない、征伐してやろと思った。あの鬼退治は、世のため人のためだった。それをバカ騒ぎや罰ゲームみたいに言われたくない。Dが「そうだったよな」と言うと、犬と猿とキジが、パチパチパチッと拍手した。

……しかし、このときクールなDは、出生の秘密を調べたときに読んだ文献のことは黙っていた。これについては昔々の著名著述家もおおいに関心をそそられたようで、福澤諭吉は「あの話には所有権の概念がない。鬼ヶ島にあった宝物は、鬼たちの所有物である。鬼を成敗して奪ったというのは、単なる泥棒行為にすぎない」という意味のことを書いていた。芥川龍之介はもっと意地悪だった。「鬼はもともと飲めや歌えやが好きな平和愛好家だった。だから、ウソはつくわ、欲は深いわ、殺し合うわの人間界を避けて、絶海の孤島に暮らしていた。その鬼ヶ島を、家来3匹に加勢させて襲い、殺し、奪い、陵辱したのは露骨な侵略行為と言うべきである」。Dは、近くの村の女たちも鬼たちにはひどい目に遭っていたじゃないか、と反論しようとしたが、芥川は先まわりして、「女人の言うところをことごとく真実と認めるとは、世間知らずも甚だしい」と、にべもない。もう少しDに好意的なユング派の解釈等もあったが、ここはあらずじだから、省略。

……Dはショックだった。だが、言われてみれば、鬼どもが近隣の村々を荒らしまわったといっても、婆さんから聞いただけで、自分の目でたしかめたわけではない。だいたい鬼たちが、芥川の言うように絶海の孤島からあんな山奥まで出張ってきたというのも、ちょっと辻褃の合わないところがある。途中にいくらでも裕福な町や村があったはずだし、わざわざ辺鄙な村までやってきて、荒らしまわっても、得することなんかなかったはず。あの婆さんの言うことを信じたオレが、ウブだったのか……。

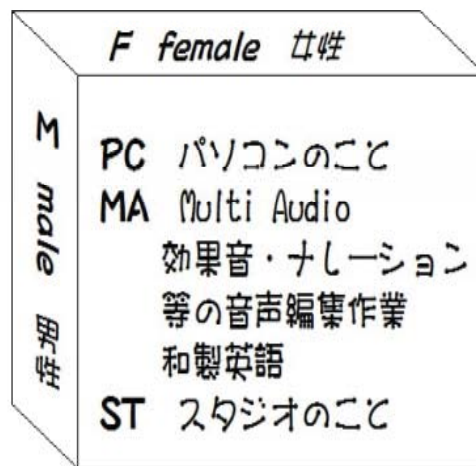
……「もうひとつあるでしょ、あれが」と誰かが言い、Dの気を引くためか、ゴホンッと咳払いをした。Dにもわかっていた。桃はもともと高地の果樹。婆さんがオレを拾ったのも、それが事実だとして、川の上流だった。たしかにあそこはとんでもない山奥で、絶海の鬼ヶ島までは遠かった。しかし、Dはあの長かった道中を、犬と猿とキジにキビ団子をわけてやるシーンだけでつないでしまった。素材Vがなかったり、番組の尺が足りなくなったとき、みんなやっていることだが、あれではオレたちが本当に鬼ヶ島まで行ったのか、本当に鬼退治をしたのか、と疑われた場合、少々説得力に欠けることは否めない。

……キジがPCの上で羽を広げ、「言われっ放しじゃ悔しいよ」と言った。犬はMAの卓に足を突っ張り、「数字は取ってる。見てくれる人は、見てくれているんだよ。文句あるかっ」と吠え立てた。やばい。社内で騒動を起こすのはまずい。Dは気が気ではなかった。



……さっきから突っかかってくる誰かが「ふん」と鼻を鳴らした。「わかってないなあ。バラエティーは、テレビの前の視聴者にワーワー、キャーキャー言わせるだけでは仕事の半分しかやったことにならないって言いませんでした？ 世の中と渡り合って初めて、テレビにしか作れない公共空間が作れるんだと。何がいまの視聴者を笑わせ、驚かせて、そのうしろにある世の中まで巻き込んで揺り動かす毒になるのか。そこを考えてもらいたい、と言っているんです」

……聞きつけたのは、ST内を駆けまわっていた猿だった。「うるせー。そっちこそ、わかってねーな。このごろはTもF1もM1も、身近な話題でしか盛り上がらねーんだよ。MとFの2と3だって、たいして変わんねー。オレらの仕事はそういう連中が相手なの一つ。わきからゴチャゴチャ言わねーでくんねーかな」



……誰かもしつこかった。「そういう視聴者を作ったのも、最近のテレビじゃありませんか。テレビは世の中に話題を提供し、みんながそれを共有し、共振させることで、世の中をまとめてきた大事なメディアじゃないですか。そのテレビが身のまわりのネタしか取り上げなかったら、みんなの関心もそこ止まりになってしまう。だから、ちまちまドメスチックなんて言われちゃうんです。そんなこと、わかりきったことでしょ。テレビにはそのくらいの影響力があるって、先輩から教わらなかったんですか」とか、どうか。

……キジは「聞いてないもーん」とさえずり、犬は「知らんっワンツ」とそっぽを向き、猿も「そんな古いこたー、わっかんねー」とうつむいた。Dは焦った。劣勢は覆いがたかった。やがてDは、3匹が自分を見つめていることに気がついた。物心ついたころからの友だち、いつも助けてくれた彼らの目が、じっと見ている。何かしなくてはいけない。何か動かななくては……。

……そのとき、タフなDはヒラメいた。逃げていてはダメだ。オレのトラウマ、オレ自身の出生の謎に正面から立ち向かうのだ。あの爺さん、婆さんはもうあの世だが、鬼というヤツはいつの世、いつの時代にもいる。あいつらなら何か知っているかもしれない。連中が裏にまわって、いまも世の中を震え上がらせているとしたら、ただじゃおかない。正体を暴いて、こらしめてやる。長い道中だ。道々、いろんな人間にも出くわすはずだ。FとMの1と2と3とかじゃない、生身の、手強い連中かもしれないが、じっくり世の中ってやつを知るいい機会になるだろう。いや、そうしなければ、オレ自身の人生が、ご都合主義を寄せ集めた安直なバラエティーみたいになっちまう。

……Dはデスクから立ち上がると、「鬼だっ。もう一度、鬼ヶ島へ行くぞー。みんな

な、ついてこい！」と大声を張り上げた。彼のまわりで犬と猿とキジが、キャッキャッキャッと跳んだり跳ねたりし始めた。

と、これが前回までのお話でした。

さ～て、いよいよ最終回ですっ。



## VI おわりに——バラエティーに新しい力と魅力を

バラエティーは報道やドラマとちがい、不定型こそが特徴の番組スタイルである。その自由さの内には、放送というメディアに課せられた枠それ自体を揺さぶり、ときには突き破ることによって、人々の心を解放し、四方八方に広がる共振と共鳴を生み、より自由な公共空間と社会を作り出していくという働きが潜んでいる。

このようなバラエティーの特性と、放送法あるいは放送倫理による表現の規制との関係をどう考えるべきかについて述べたのが本意見書である。

\*

表現の自由は憲法21条が保障するところであるが、そこにはそれぞれの表現の媒体に応じた内在的な制約がある。

テレビ放送の場合、一般的には、一定の電波を独占することがとくに許されて初めて実現する表現媒体であること、視聴者の生活空間にじかに届いて視聴者の感受性に直接訴えるために非常に大きな影響力を持つこと等を理由に、放送法による表現内容



の規制が行われると説明されている。

放送法3条の2は、①公安及び善良な風俗を害しないこと、②政治的に公平であること、③報道は事実をまげないですること、④意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること、と規定する。

しかし、これらの規定は抽象的で、多分に曖昧でもあるから、実際の番組制作に当たってはより実践的な指針がなければ、いたずらに萎縮した「安全な」表現のみが放送される結果に陥るおそれがある。それでは視聴者に画一的で硬直した表現のみが伝達されることになり、公共性は痩せ細り、社会の自由が失われ、多様な思想と表現の交換によって成り立つ民主主義が形骸化することにすらなりかねない。

とはいえ、詳細で具体的な放送基準を国家が定めることを認めるのでは、表現の自由の保障自体が危うくなる。したがって実践的な指針は、表現する側が自主的に定めることが肝要であることは言うまでもない。

この基準が、「放送倫理」と総称される放送事業者の自主基準である。そのおおもとは民放連とNHKが定めた「放送倫理基本綱領」があり、NHKと民放連は、それぞれさらに具体的な「番組基準」「放送基準」を定めている。

委員会は、この放送倫理に照らして番組の内容に問題がないかを検証する第三者機関であるが、バラエティー番組の場合、放送倫理として放送表現に課せられた枠組みを四角四面に適用したのでは、バラエティーという表現形態の持つ特性それ自体を殺してしまう役割を委員会が演じることになりかねない。

そうならないために、委員会がバラエティーの諸問題を検討し、意見書をまとめるに当たり、バラエティー番組の特性を活かす放送倫理のあり方とは何かをめぐって腐心したことは、緒言にも記したとおりである。

\*

私たちは、バラエティーが萎縮することを望まない。そういうことは絶対に避けなければいけない、と考えている。

いまやテレビの中核的表現スタイルとなったバラエティーは、広範な視聴者のものの感じ方、考え方に大きな影響を与え、民主主義の進展にも寄与してきた。そんなバラエティーが力を失い、先細りになっていいはずがない。

それゆえに私たちは、表現への規制それ自体を笑いの対象とするような特性を持った表現形態に対しては、放送倫理の解釈に当たっての弾力的な取り扱いが不可欠である、と考える。可能であれば、放送番組一般を対象とした放送基準とは別に、バラエティー番組についての実効的な指針というようなものを作ることが適切な場合もあるだろう。

意見書の前半でも述べたように、民放連の「放送基準」にはバラエティーに関して積極的・肯定的に「こうありたい」と指し示す項目がない。不定型で、自由な創作を

旨とするバラエティーに屋上屋をかさねるような指針や指標をかぶせることには慎重でなければならないが、制作者の意欲を高め、番組の面白さ・愉しさとともに鋭さ・深さを追求するにはどうすればよいかを、局を超え、系列を超え、あるいは民放かNHKかの相違を超え、放送界全体で議論・検討する場がいまこそ必要とされているのである。

そのような場で検討すべきテーマはいくつもある。

いまバラエティー番組を作っている制作者たちが考えるバラエティーとはどういうものか。

さまざまな年齢層、生活環境、専門性、嗜好等を持つ視聴者は、それぞれバラエティーに何を期待しているだろうか。

なぜバラエティーは公権力の干渉を受けるような隙を作ってしまうがちなのか。そうならないために、何を、どうすればよいのか。

各種のバラエティーによって、視聴者の感受性やものの見方、公共空間の形成、社会の動向はどう変わり、あるいは変わらないのか。

こうした実際に即したテーマの調査・研究を進めること、制作者と視聴者が語り合うシンポジウム等を開催することなども考えられるであろう。委員会としても、そのような集まりを企画し、この問題について関係者と議論し、さらに考えを深める用意がある。

また、放送界にはいくつも番組コンクールがあるが、優れたバラエティー番組を顕彰する制度を充実させることも、制作者を励まし、バラエティーの発展に寄与するのではないだろうか。

これらは、この意見書でも述べたさまざまな問題ともかさなるが、関係者が真剣に議論し、バラエティー制作の基盤をきちんと築くことは、一定の制約下にある今日の放送界が、よりたしかな自主・自律を目指す際の力強い一歩になるはずである。

\*

バラエティー制作者には「何をやってもいいし、何でもあり」の心意気を失わないでいただきたい、と私たちは思う。

ただ、何をやるにせよ、言葉は悪いが、「確信犯」であってほしい。絶対これをやりたいという欲求、やり抜くんだという覚悟、これをやらなければしかめっ面をひっくり返せない、表現したいことが表現できない、だからやるんだという確信。私たちは、番組からそういう制作者としての内的必然性が伝わってくるバラエティーを見たいと思う。

これは、作り手の「顔」が見える、ということである。個性と言ってもよい。意志や意地やセンスと言っても変わらない。

ところが、いわば「当て逃げ」のような粗雑なネタ、その場の「軽いノリ」の悪ふ

ざけを寄せ集めて作ったバラエティーがいささか目立つのではないだろうか。先に見たバラエティーが嫌われる瞬間のすべてとは言いたくないが、いくつかはそうである。

ここからは、見つからなければ、見咎められなければ、それでいい、という制作者の浅慮が感じられる。芸人やタレントを含め、大勢が出入りする制作現場ではその種のハプニングはつねに起きるだろうが、それを制御できない制作者の力量不足、そうした映像をカットできない制作者のセンスの悪さ。そういうものも、同時に感じてしまう。

当て逃げをしておいて、「気がつかなかった」「軽いノリだった」と弁解することほど見苦しいものはない。そうやって逃げないでほしいし、そうやって逃げなければならぬような番組を作ってほしくない、と私たちは思う。



作り手の顔がきちんと見えるバラエティーを作るためには、制作者は番組の隅々まで設計し、計算し尽くす緻密さを持っていなければならない。ハプニングやアクシデントまで計算に組み込んでしまう度胸と細心さ。この2つはバラエティーに限らず、あらゆる表現がその名に値するものとして成り立つときの条件である。

\*

いま、ここで言っているのは、放送人の使命と倫理の関係のことである。

放送倫理を狭く捉えれば、それは単なる「規制」や「制約」ということになる。だが、もう一度、放送界を律している「放送倫理綱領」にもどれば、その前段に「福祉の増進」「文化の向上」「教育・教養の進展」「産業・経済の繁栄」「平和な社会の実現」等々と、放送の「使命」が力強く示されていることを見落とすべきではない。

さらに言うならば、放送法がその「目的」の条項に掲げる「公共の福祉への適合」「表現の自由の確保」「民主主義の発達」もまた、放送の「使命」であろう。

倫理は使命から切り離され、ひとり歩きを始めるとき、単なる規制になる。こうるさい制約になる。

だが、使命と一体化し、使命を追求するとき、それはある表現形態を選択し、あるいはあらたに作り出す際の覚悟にもなれば、根拠にもエネルギーにもなる。視聴者や世間の響きを買ひ、眉をひそめさせるような表現も、正当な使命追求の姿勢が明らか

であれば、高い倫理性を主張できるであろう。それはまた多くの視聴者の共感・共振を呼び、あらたな公共空間の形成につながっていく。

表現の自由の枠組みは時代と社会によってたえず変化していくものであるし、放送倫理も放送の使命を追求し、表現の自由を行使する過程で変遷していくものであろう。そのような永久運動の原動力になることこそ、バラエティーに期待される役割である、と委員会は信じている。



\*

しかし、そうやって作ったバラエティーでも、視聴者から反発されることはあるだろう。

かつて反発や批判は、放送の送り手と受け手のあいだで交わされるコミュニケーションのひとつとしてあり得たが、いまその関係は、すっかり変わっている。反発がコミュニケーションにならないまま、視聴者はテレビを見限り、離れていく。一々挙げるまでもなく、いまの世の中には、テレビに取って代わることのできるものはたくさんある。

テレビ離れの実情について、必ずしも十分な調査データがあるわけではないが、視聴者が、個々の番組が起こすさまざまな不祥事のたび、放送界全体への不信を募らせてきたことは、多くの放送人が肌身を感じているにちがいない。視聴者は、テレビをつけてはいても、しだいに真剣には見なくなる。

この現実が、バラエティーに不利に働くことがある。

視聴者が、番組全体をひとつながりのものとして見てくれなくなることである。視聴者はたまたま目にした場面に不愉快さや不適切さを感じると、即座に番組全体がそういうものだという印象を抱いてしまう。今回見た視聴者意見のなかにも、それとおぼしいものがないわけではなかった。

私たちは視聴者の一人として、番組の一場面一場面を断片としてではなく、相互に内的関連性を持つものとして捉える努力をするとともに、多くの制作者や出演者がときには迷いながら、しかし、真剣にバラエティーを作っている姿を忘れないようにしたいと思う。少しおこがましい言い方をすれば、それは、視聴者もまた寛容さを持つということである。

＊

なおそれでも、バラエティーに対する批判や反発が収まることはないだろう。最初の方で誰かが言っていたように、ひたむきに真面目に、面白くも辛く、楽しくも切なく、馬鹿々々しくも充実して作っても、いろんな意味で毒を持つバラエティーの、これは宿命のようなものである。いや、それは誇りでさえあるかもしれない。

そのときこそ、視聴者が応援してくれる。視聴者が、「あの番組をつぶすな」「あの出演者を守れ」「あの制作者のバラエティーを見たい」と言ってくれる……。放送局と制作者がたくさん視聴者とのあいだに、そのようなコミュニケーション空間、双方のおしゃべりと笑いと確信が共振し合う公共空間を築けるかどうか――。

もう一步踏み込んで言えば、制作者たちが、そしてむろん放送局が、このバラエティー表現のために、あるいはこの公共空間を広げ、充実させるために、十分なコストをかけよう、と意気込むことができるかどうか。また、単なる事なかれ主義に堕したコンプライアンス強化など邪魔なのだ、と蹴飛ばすことができるかどうか――。

私たちは、バラエティー制作に精魂を込める制作者たちが登場し、新しい力と魅力にあふれたバラエティーをたくさん見せてくれる日を待っている。

